

『護生画集』 解題 (1) —— 豊子愷の仏教帰依から第一集まで

大野 公 賀

はじめに——豊子愷と李叔同(弘一法師)

豊子愷(ほうしがい、一八九八—一九七五)は一九二〇年代から、「子愷漫画」と称される独特のイラストや、『縁堂随筆』に代表される格調高い散文で、中華民国期の新興市民階級を中心に一世を風靡した芸術家である。その活動は、学生の個性を尊重し、自由を重んじることで知られた立達学園の設立および教育、青少年向け良書の出版社である開明書店での編集、また『源氏物語』や夏目漱石などの日本文学の翻訳に至るまで、実に多岐にわたっている。

豊子愷はまた、民国期を代表する高僧弘一法師(一八八〇—一九四二、一九一八年出家、俗名李叔同)の弟子としても知られている。二人の出会いには、豊子愷が浙江省立第一師範学校(以下、第一師範)に入学した一九一四年に始まる。それは弘一法師の出家以前のこと、李叔同は当時同校で西洋美術と西洋音楽を教えており、豊子愷はその学生であった。

豊子愷が第一師範に在学していた当時(一九一四—一九一九)、同校の校長を務めていた経亨頤(一八七七一—一九

『護生画集』解題(1)——豊子愷の仏教帰依から第一集まで

三八)は梁啓超の思想に深く賛同しており、戊戌の政変に際しては変法派の盟友であった伯父、経元善と共にマカオへ亡命した。経亨頤はまた、蔡元培(一八六八—一九四〇)が革命思想の普及宣伝を目的に、一九〇二年に上海で設立した愛国知識人の革命団体、中国教育会の会員でもあった。

蔡元培は中華民国の建国後、初代教育総長を務めたが、新時代の教育宗旨として「軍国民教育・実利主義・公民道徳・世界観・美育」の五項目を挙げ、これら相互の関係について「公民道徳を中核とする。世界観と美育はいずれも道徳を完成させるもので、軍国民教育と実利主義は必ずや道徳を基本とせねばならない」と論じた⁽¹⁾。しかし、当時教育部には清朝の教育管轄機構である「学部」出身の旧派官僚が少なからずいたため、宗旨制定に先立って開催された臨時教育会議では蔡元培の提唱した五項目をめぐる激しい議論が交わされた。最終的に、一九一二年九月に教育部が公布した教育宗旨では「道徳教育を重んじ、実利教育と軍国民教育を以てこれを輔け、更に美感教育を以てその道徳を完成させる」と定められた⁽³⁾。

このような状況下、梁啓超と蔡元培の信奉者であった経亨頤が、第一師範の教育で重視したのが徳育と美育である。そして、そのような教育方針に基づいて、同校に招聘されたのが李叔同であった。李叔同は天津の名家の出身であったが、経亨頤と同じく戊戌の政変に際し、累の及ぶのを避けて上海へと向かった。その後、上海の南洋公学で蔡元培の教えを受けた後、一九〇五年に日本に留学し、東京美術学校(現、東京芸術大学)で西洋画を学んだ。日本では他にも西洋音楽を学び、また中国新劇の魁とも言うべき春柳社を結成して、東京の本郷座で俳優として舞台に立つなど、李叔同は西洋の芸術全般に関する豊富な知識と経験を身に付けて一九一一年に帰国した⁽⁴⁾。

李叔同は一九一二年から出家までの七年間、第一師範で教壇に立った。学生らは李叔同の知識や才能に加えて、そ

の「真面目で嚴肅、献身的」な教育精神や人格に魅了されたという。⁵ 豊子愷もそうした一人で、李叔同に絵の才能を認められたことで、豊は「絵を専門に習い、一生を芸術に捧げることを決意した」のである。⁶

その後、李叔同は一九一八年七月に突如出家し、釈演音（号弘一）となった。李叔同の出家は中国の文芸界に衝撃を与えたが、それは李叔同のように、最初期に西洋文化を受容し、中国にもたらした者が、中国の伝統的価値観へと回帰したことへの衝撃でもあった。なかでも、李叔同を梁啓超の言う「新民」の育成と社会変革の同志と考えていた経亨頤の驚きと衝撃は計り知れないものであっただろう。その年の終業式の訓示で、経亨頤は学生が西湖の詩的情緒や宗教的雰囲気に魅了され、「社会的任務」を忘れることを危惧して、西湖を修養の場と考えないようにと指示を与え、また学期中に仏典を読むことを禁じた。⁷

豊子愷は第一師範卒業後、同じく李叔同の高弟であった呉夢非や劉質平とともに、芸術教師育成のための上海師範専科學校（男女共学・二年制）を創設し、また中国で最初の美育學術団体である中華美育会を組織するなど、芸術教育に力を尽くしていた。李叔同の出家後も、豊子愷の李叔同に対する崇敬の思いが変わることはなかった。しかし、芸術と宗教という視点から言うならば、豊子愷は当時、むしろ蔡元培の「美育を以て宗教に代える」⁸ という説に賛同しており、宗教ではなく芸術による解脱を提唱していた。⁹

ところが、豊子愷はその後、日本留学（一九二一年）や立達学園の設立（一九二五年）などを経て、一九二七年には弘一法師による仏教帰依式を受けるに至った。青年時代の豊子愷に、李叔同は芸術の師として、将来を左右する程の大きな影響を及ぼした。この帰依式以降、弘一法師は芸術に加えて宗教という面でも、豊子愷の人生に決定的な作用を果たすことになる。

豊子愷は弘一法師を賛美する散文を多数発表しているため、弘一法師の弟子として生涯を通じて敬虔な仏教徒であったと考えられることが多い。しかし、豊子愷は弘一法師を崇敬しつつも、その教えのすべてに賛同していた訳ではない。また、当時の仏教界および仏教徒の世俗性や迷信性に対する不信などもあり、一九三〇年代半ば以降は次第に、弘一法師の教えを離れ、独自の仏教観を確立していく。

小論で取り上げる『護生画集』は、豊子愷が弘一法師との約束を守る形で、一九二九年から一九七三年まで四〇年以上の年月をかけて完成させた画集で、全六集、計四五〇幅の絵と題詞から成る。全六集の根底を流れるのは、豊子愷が中国社会上に提唱し続けた「護心思想」である。「護心思想」とは、すべての事象は心によって生みだされるのであるから、人は心を正しく護持すべきであるという考えで、その形成には弘一法師や馬一浮の影響がうかがわれる。

五四新文化運動の影響を受け、宗教ではなく芸術による解脱を提唱し、新興市民階級の一人として上海のモダンライフを満喫していた豊子愷が仏教に帰依し、また時に生命の危険さえも冒しながら『護生画集』を完成させるに至ったのは、いったい如何なる要因によるのだろうか。それはあくまでも、豊子愷個人の心の問題なのか、あるいはそこに何らかの時代的要請があったのか。

この問題について考察するにあたり、小論ではまず豊子愷の仏教帰依から『護生画集』第一集の作成に至るまでの経緯、および同画集に対する社会的評価について論じたいと思う。

第一節 新興市民階級と上海モダンライフ

まず、豊子愷の仏教帰依までの経緯について整理しておきたい。豊子愷の故郷浙江省はそもそも仏教の盛んな地域であった。豊も幼少期には、熱心な仏教徒である祖母に連れられて、菩提寺の西笠庵にしばしば参詣している¹⁰。晩年に綴った幼少期の回想にも、孟蘭盆の施餓鬼法要や「謝菩薩」などの様子が記されている。「謝菩薩」とは別名「拝三牲」とも言い、豚の頭や魚、鶏を菩薩に捧げ、病を治癒してもらおうという民間信仰で、豊子愷自身も何度か菩薩に祈った経験を持つ¹¹。しかし、第一師範に進学し、夏丐尊や李叔同らから新式教育を受けるにつれて、このような迷信的な仏教信仰に対して、豊は激しい嫌悪感を抱くようになった。同校は当時、教員の質の高さと近代的な設備から浙江省随一の中等教育機関とされており、日本への留学経験をもつ教員が多数在籍していた。

豊子愷が第一師範を卒業する頃、即ち五四新文化運動当時、知識人の間で美学を社会形成の手段とする芸術立国論が流行した。蔡元培の美育思想はその代表的なものであるが、それは同時に宗教の否定でもあった。蔡元培は一九一七年の北京神州学会の演説において、精神上の役割には「知識、意志、感情」の三つがあるが、そのうち「知識と意志」は科学と道徳の発展によって既に宗教の枠を離れており、残る「感情」も美感の育成によって宗教から離脱すると述べ、「美育を以て宗教に代える」ことを主張した¹²。

豊子愷は一九一四年から一九一九年という時代を、浙江省における五四新文化運動の中心地であった第一師範で過ごし、また蔡元培の教え子の李叔同から芸術を学んだこともあって、豊子愷の芸術観には五四新文化運動の影響が濃

厚である。前述のように、豊子愷は仏教帰依式以前には芸術による解脱を提唱していたが、これも蔡元培の「美育を以て宗教に代える」という主張の影響と言えよう。豊子愷がこのような芸術観および宗教観を離れ、仏教へと導かれて行ったのは、如何なる経緯によるのであろうか。

一九二六年春、豊子愷は同じく第一師範の恩師である夏丐尊とともに、約六年ぶりに弘一法師（李叔同）を訪ね、次のような感慨に打たれた。

この一〇年来の心境を思い起こすと、まるで常に放し飼いの羊の群れを追っているかのようで、東側の羊をどうにか捕まえると、今度は西側の羊が逃げ出してしまふ。東を引っ張り、西を捕まえ、前を見ては後ろを振り返り、あれこれ悩むことばかりで、ほとほと疲れ果てた。進むべき道を自分で決めていなければかりか、自分の状況を認識する余裕さえない。今回杭州に来て、弘一法師という明鏡の中に一〇年来の自分の姿があらまし映し出された。今回のことは、絶え間なく続く出鱈目な夢の中の欠伸のようなもので、ごちゃごちゃと乱れた夢のような世界をほんの暫くだが離れることが出来た。目をこすつて考えてみると、それはこの儂い人生という路上の一つの駅のようなでもあり、私は数分間の静観を得ることができた。¹³

一九一九年に第一師範を卒業して以来、豊子愷は上海、東京、浙江省上虞そして再び上海と場所を変え、忙しい日々を過ごしてきた。特に豊が弘一法師を訪れた一九二六年当時は、立達学園の創設から間もない時であり、開明書店設立の準備期でもあった。豊子愷らは理想の実現のために、まさに日々奔走していた。故郷石門湾や上虞とは異なり、大都市上海は隣人との関係も希薄で、¹⁴親しい者以外には互いに心を閉ざした「あまりにも緊張感に満ちた、あまりにも恐ろしい」世界であった。¹⁵また、一九二五年の五・三〇運動など、国内情勢も日ごとに不安を増していた。



図版1



図版2

しかし、豊子愷には当時、立達学会の仲間がおり、理想の実現という夢があった。漫画の創作という点でも、当時の豊子愷は順調であった。一九二五年当時、『文学週報』の編集主幹をしていた鄭振鐸が同誌五月号に豊子愷の作品を「燕婦人未帰（漫画） 子愷」（図版一）と題して掲載して以来、豊子愷の作品は漫画という名称の普及と共に評判を呼び、早くも同年一二月には文学週報社から最初の画集『子愷漫画』（図版二）が出版された。同書には夏丐尊や鄭振鐸、朱自清、兪平伯らから序文や跋文が寄せられた。反響も大きかったため、翌一九二六年には開明書店からも出版された。

一九二六年に豊子愷と夏丐尊が弘一法師を訪れた数ヵ月後、弘一法師が上海を訪れた。この折、豊子愷は弘一法師とともに法師が青春時代を過ごした場所を訪れ、また話を聞くことで「人生の無常の哀しみ、そして縁の不可思議さ」に思いを馳せ、また「仏教に対する憧憬を少し味わった」。この弘一法師と過ごした二日間は、豊子愷にとって「非常に感情が高ぶり、また厳粛」なものであった。しかし一方で、この間は「酒を飲むことが出来なかったため、家に戻るや否や、家人に酒を買いに行かせた」と豊子愷は記している。¹⁶

仏教では、酒は本性を曇らせ、過失や犯罪の原因となるという考えから、不飲酒戒ふおんじゅと称して飲酒を戒める。これは不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒とともに、在俗信者の守るべき五戒の一つである。弘一法師が上海にいた間、豊子愷は弘一法師を尊重して酒を飲まなかったであろう。上文のように、この折の不飲酒は一時的なもので、豊子愷の仏教への思いがまだ「憧憬」程度であったことがうかがわれる。

しかし、その一年後、豊子愷は無常の思いに苛まれるようになり、それが仏教信仰の出発点となった。¹⁷ その具体的な契機が何であったのか、豊子愷は明確には語っていない。日中戦争の終結から半年後に、豊が年下の友人の夏宗禹

に宛てた手紙から、その理由を考察してみたい。

戦後の混乱期に仕事もままならず、諸事に悩む夏宗禹に豊子愷は次のように助言した。

すべて自然に任せなさい。いずれにしても私は永遠に君の理解者であり、君の将来が希望に満ちていると確信している。しかし一方、理想をあまり高くしすぎないよう、そして事にあたってはあまり真剣になりすぎないように、君に勧める。なぜならば、社会が結局のところ、このような社会だからだ。理想があまりに高く、態度があまりに真面目すぎると、いたずらに痛い目に遭う。それは自ら苦勞を求めるようなものだ。この社会は本当に人を冷酷にし、人の誠意を失わせる。しかし、我々は努力して困難に立ち向かわねばならない。私はこの困難に直面するのを恐れたのだ（二重人格になるのも肯んじえぬことであった）。そのため戦前の一〇年間は俗世を離れ、戦時中もまた失業して既に三年となる。¹⁸

この俗世を離れた一〇年間とは、仏教帰依式を受ける前後の一〇年と考えられる。豊子愷に、「この社会は本当に人を冷酷にし、人の誠意を失わせる」と感じさせた社会とは、どのようなものであっただろうか。五・三〇運動以降、国内では民族運動が全国的に急進化し、同時に列強と軍閥勢力による圧力も高まっていた。国民党内部の左右両派の対立も激化し、一九二六年七月には蒋介石の北伐戦争が開始された。北伐軍が長江流域に進出するにおよび、同域に多くの利権や租界を持つ帝国列強との衝突は不可避のものとなった。一九二七年三月には英米による南京発砲事件が発生し、一般市民を含む数千人の中国人が殺傷された。これ以降、蒋介石は中国共産党および国民党左派との対決姿勢を明確化した。また政敵の王精衛の帰国による武漢国民政府との対立もあり、蒋介石は四月に上海クーデターを發動し、上海はじめ各地の労働者や共産党員の大虐殺を行った。

このような情勢の下、立達学園でも創設当初からの立達学会員に対する国民党右派の圧力が増大し、経費不足を理由に夏丐尊や豊子愷が主任を務めていた中文科や芸術科も停止となった。それまでの人生において、特に大きな挫折を経験することもなく、自己の情熱と信念に忠実に、自由に生きてきた豊子愷にとって、立達学園創設後の上海での数年間は、まさに人間の本質的な醜さや残酷さ、愚かしさを実感する日々であったことだろう。

またこの頃、北伐軍によって軍閥の一掃された地域や都市部では、農民や労働者による民衆運動が嵐のような勢いで展開された。この労農運動のあまりの激化に対して、当初は祖国の独立と統一を熱望していた民族資本家や地主も次第に動揺を覚えるに至り、上海などの大都市へと避難した。このため都市部を中心に、資本家や地主と労働者の間の階級対立や経済格差が更に拡大した。例えば、一九二〇年代上海における典型的な五人家族の平均月収を比較すると、工場労働者などの下層貧民家庭が三〇元程度であるのに対し、一般市民家庭は六六元、中流家庭は百〜二百元、上流家庭は二百元以上であった。¹⁹⁾

一九二〇年代末期から一九三〇年代にかけて、上海は世界恐慌の影響や度重なる内戦にも関わらず、未曾有の繁栄を謳歌していた。その背景には国民党の思惑が存在する。国民党は一九二八年に首都を南京に遷すと、沿海部の経済建設を急速に推し進めたが、なかでも上海を国民政府の支柱とすべく、特別市に指定し、「ニュータウン大上海建設計画」を打ち立てたのである。²⁰⁾ こうした経済発展を背景に、上海では一定の教育水準と経済力を有する市民階級が出現し、都市生活を享受していた。街には物資があふれ、人々の消費への欲望をかきたてた。その結果、上海などの都市部では拜金主義や刹那主義が蔓延したが、その根底には上述のような社会情勢や、国家および自分自身の将来に対する漠然とした恐怖や不安が存在していたのである。

一般市民および中流以上の人々は競って、街の各所に林立する大小のダンスホールやカフェ、映画館などに現れた。特に映画は新種の娯楽として普及しており、映画館には上海の老若男女が集った。魯迅もまた映画を好み、ほぼ毎週のように家族とハイヤーでハリウッド映画を見に出かけていたという。これについて藤井省三は「反体制作家」魯迅が職業作家として中産階級の暮らしを享受していた事実は、一九三〇年代上海で近代的市民社会が一部であるにせよ実現されつつあったことをよく物語る」と指摘している⁽²¹⁾。百貨店も娯楽の場として、彼ら市民階級を引き寄せた。先施、永安、新新、大新公司といった上海の四大百貨店では、映画館や劇場を併設する遊芸場を設置し、上海在住者のみならず、地方からの来訪者を魅了した⁽²²⁾。

豊子愷は無常観に苛まれる一方で、また新興市民階級の一人として、上海のモダンライフを享受してもいた。一九二八年一月一九日、シュューベルトの没後百年を記念して、工部局交響楽団 (Municipal Orchestra and Band) が上海市政庁 (Town Hall) でコンサートを開催した。この交響楽団は一八七九年の結成当初は私営であったが、一八八一年以降は工部局 (Municipal Council) の運営となった。工部局は当初、太平天国の乱を契機に一八五四年に米英仏三国によって組織されたが、一八六二年にフランスが公董局をつくって離脱したため、翌年からは米英共同租界の行政機関となっていた。工部局交響楽団では冬のシーズン (一〇月から五月末まで) にはタウンホールで「シンホニーコンサート、ソロキストコンサート、テーコンサート等」を開催していた⁽²³⁾。このシュューベルトの没後百年記念コンサートも、恐らくそうしたコンサートの一つであったのだろう。尚、工部局交響楽団のコンサートに足を運ぶ中国人は当初、極めて少数であったが、租界における中国人の地位向上にともない、徐々に増えていった⁽²⁴⁾。

豊子愷はこのコンサートのために、当時住んでいた上海市街北東部の江湾から南京路まで来たものの、時間が早す

ぎたのと体調不良から、ひとまず市政庁のすぐ斜め向かいにあった先施公司以て珈琲を飲んで休んだ。これはマラリアの前兆で、豊子愷はコンサートを諦めざるを得なかった⁽²⁵⁾。以上の逸話から、一九二八年当時、豊子愷には工部局交響楽団のコンサートや喫茶店での珈琲を楽しむような習慣と、それを可能にするだけの経済的余裕があったことがわかる。また、豊子愷は一九三三年に石門湾に自宅「縁縁堂」を建て、同地に転居した後も、仕事でしばしば上海を訪れた。帰りには、子ども達へのお土産として必ずチョココレートを買っていた。当時、石門湾には素朴なお菓子しかなく、チョココレートを食べるのは豊家の子ども達の「一大楽事」であったという⁽²⁶⁾。

そのほかにも、豊子愷はバターを塗ったパンや牛乳も頻繁に口にしており、上海の所謂摩登ライフを満喫していたと考えられる⁽²⁷⁾。また、鄭振鐸との思い出を綴った散文には、一九二〇年代後半のある日、鄭に誘われて二人で洋食を食べに行ったところ、支払いの段になって鄭振鐸に持ち合わせが無かったため、豊子愷が二人分の食事とブランドデーの代金として五元支払い、その翌日に鄭振鐸が立達学園を訪れて豊に一〇元を渡そうとしたが、豊子愷は受け取らず、その一〇元で夏丐尊や匡互生ら同僚七、八人とともに全員が酩酊するまで飲んだと記されている⁽²⁸⁾。尚、一九二〇年代当時、前述の下層貧民家庭および一般市民家庭での大人一人あたりの食費は毎月それぞれ四元六角、七元三角であった⁽²⁹⁾。また一九二七年当時、江湾の豊子愷の自宅にはピアノが置かれていたという⁽³⁰⁾。

榎本泰子は、当時の上海の知識人には「政治的には愛国的・民族主義的な傾向を持ちながらも、生活面では租界の欧米式文化を喜んで享受するという一見矛盾した態度」があったと指摘する⁽³¹⁾が、豊子愷や鄭振鐸、夏丐尊、そして前述のようにハリウッド映画を好んだ魯迅らは、まさにそうした上海知識人の典型であったと言える。

豊子愷は当時、上海の摩登ライフを満喫するだけの潤沢な経済状況にあったが、それは主として何に由来してい

たのだろうか。創設当時の立達学園の教師の給与は一律二〇元で、多くの教師は生活のために複数の学校で仕事を兼任せざるを得なかった⁽³²⁾。豊子愷も立達学園以外に松江女子中学でも教壇に立っていたが、それ以上に豊子愷の生活を支えたのは、開明書店などから出版した多くの著作や画集、雑誌に寄稿した原稿、また『愛の教育』や『開明英語読本』などのベストセラーの挿絵印税、そして開明書店の株式配当金である⁽³³⁾。

豊子愷は経済的に恵まれた新興市民階級の一人として、都市の繁栄を享受していたが、その一方で金銭が人の思考や行動を支配することに対して嫌悪感も覚えていた。豊子愷の妻は裕福な名家の出身で、その両親や義兄はしばしば上海の豊子愷一家を訪れ、ともに遊んだ。

ある時、当時東洋一の規模を誇ったという総合娯楽場、大世界から戻った義兄は、豊子愷に次のように語った。

上海で遊ぶのは本当に楽しいね！ 京劇から新劇、映画、語り物、講談、魔法、何でもある。お茶もお酒も、食事もお菓子も、何でもすべて選び放題だ。ほかにもエレベーターや飛行船、飛輪⁽³⁴⁾、スケート……虎にライオン、孔雀、大蛇……本当に珍しいものばかりだ！ ああ、遊ぶのは本当に楽しいね。だが、一旦お金のことを考えると、つまらないね。上海ではお金を使うのが本当に簡単だよ！ もし遊んでもお金がいらないければね、アハハハ⁽³⁵⁾……

大世界や、それに先立って造られた同様な娯楽場、新世界について、日本人による当時の上海案内には次のように記されている。

何れも高荘な建物でエレベーターを設け大同小異である。内には花園があり、動物や鳥類が居り、又は夫等の剥製があつたり、又茶店、料理店、酒店、玩具店等の売店があり休息所もあれば活動写真、講談、旧劇、新劇、

『護生画集』解題（一）——豊子愷の仏教婦依から第一集まで

芸者の唱書もあり手品、軽口の如きものがあつて随意観覧や遊樂が出来て入場料二角である。(中略)殊に夜の大世界は四馬路の青蓮閣に等しきものとも云ひ得べき空気で充満されて居る。余りなる現実の世界の驚きと嘆きは此所に放たる、のである。⁽³⁶⁾

豊子愷は義兄の言葉を聞いて、義兄は「きつといつもお金のことを思い出さずに大世界で遊べるから、このように愉快で、賛美できるのだろう」と分析した上で、金銭や価格は人の考えや行動を制限し、物事自体の趣や意義を失わせるものだとして述べている。⁽³⁷⁾ 豊子愷の別の散文には、この義兄は若い時から実家を頼りに真面目に働かず、義父の残した財産もすべて使い果たしたとあり、⁽³⁸⁾ 往年の派手な生活ぶりがうかがわれる。豊子愷はこの義兄に、お金や消費社会に踊らされる人間の姿を見、また当時の拜金主義の風潮にも空しさを覚えていたのだろうか。

第二節 仏教への帰依

一九二七年秋、弘一法師は再び上海を訪れると、江湾立達学園の豊子愷宅に一ヶ月ほど逗留した。この折、キリスト教系の出版団体広学会⁽³⁹⁾の編集者である謝頌羔と豊子愷が友人であることを知った弘一法師は、豊に依頼して謝頌羔と面会した。謝頌羔は西洋哲学にも造詣が深く、ウイル・デューラントの著作を最初に中国語に翻訳した人物である。この「敬虔な仏教徒と敬虔なキリスト教徒」が楽しげに談笑する様子を見て、豊子愷は「人の世の縁の絶妙さ」に思いを馳せ、この面談の様子を散文に綴った。そこに描かれたのは、上海クーデターからわずか数カ月後の、政治的にも経済的にも混乱し、無秩序で拜金主義の横行する上海とは思えぬような平和で清浄な世界であった。⁽⁴⁰⁾ 現実

世界が残酷であればある程、豊子愷はこの平和で清浄な世界にいつそう心を惹かれたことであろう。

弘一法師の滞在中、豊子愷は毎日夕刻の一時を法師と過ごし、言葉を交わすのを楽しみにしていた。当時、二人がどのような話をしたのか、豊は何も記していない。しかし、弘一法師との会話、あるいは弘一法師の存在それ自体が、豊子愷に何らかの宗教的感化を及ぼしたであろうことは想像に難くない。

一九二七年一〇月二一日（旧曆九月二六日）、三〇歳の誕生日を迎えた豊子愷は弘一法師による仏教帰依式を受け、嬰行という法名を授けられた。⁽⁴¹⁾ 嬰行とは、『涅槃経』で菩薩の定める五種の修行法の一つ「嬰児行」^{（ようじぎょう）}に由来する。そのほかの四行は聖行、梵行、天行、病行である。また弘一法師自身も出家以前、一九一六年に断食を行った際には老子の『道德経』第一〇章の「能嬰児乎（能く嬰児たらんか）」により、自ら「李嬰」と称していた。⁽⁴²⁾

仏教帰依式を受ける少し前に、豊子愷は一九二四年に死産した男児「阿難」について次のように記している。

阿難！ 心臓の一打ち⁽⁴³⁾がお前の一生だ！ お前の一生はなんと簡単なことか。お前の寿命はなんと短いことか。私とお前の間の父子の縁もなんと浅いことか。

しかし、これらはすべて私の妄念である。私とお前を比べてみれば、どれほどの違いもないのだ。数千万光年の中の小さな肉体と永劫の中の数十年を「人生」とよぶ。人類がこの世に生じて以来、この「人生」は既に数千万回も繰り返され、すべて優曇華の花や水泡のように忽ち現れ、また忽ち消える。今それを繰り返す番が私に巡ってきたのである。そうである以上、たとえ私が百歳まで生きたとしても、永劫の中ではお前の一打ちと何の違いもない。今、私はお前の命の短さを嘆いたが、それはまさに九九歩退却した兵が百歩逃げた兵を笑うようなもので、その差は極めてわずかで、本質的にはまったく同じなのだ！（中略）

しかし、これはやはり私の妄念である。宇宙における人の生滅は、大海の波濤の起伏のようなものである。大波小波、すべて海の変幻でないものではなく、海に帰さないものはない。世間の一切の現象は皆、宇宙の大生命の顕れである。阿難！ お前と私の縁は決して希薄ではない。お前はすなわち私で、私はすなわちお前である。お前であろうと、私であろうと、そんなことは一切関係ないのだ！⁴⁴

以上の散文「阿難」において豊子愷は、人間を含むこの世の一切の現象はすべて実体のない存在であり、瞬時たりとも同一ではありえないにも関わらず、我々が人生に苦しみを感じるのはこの無常を理解せず、妄念の虜になっているからだと述べている。

仏教で「阿難」とは、釈尊のいとこで、また十大弟子の一人として、釈尊に二五年間つかえたアーナンダ (Ananda) を指す。豊子愷は散文「阿難」の中で、死産した息子を阿難と名付けたのは、豊家では子どもたちの名前の一文字に「阿」を付けて、阿宝（長女・豊陳宝）、阿先（次女・豊林先）、阿瞻（長男・豊華瞻）と呼ぶ習慣があり、死産した息子は母親に難儀な思いをさせたので、「阿難」と呼ぶとしており、アーナンダとの関係については何も記していない⁴⁵。しかし、この文章には「諸行無常⁴⁶、一切皆苦⁴⁷、諸法無我⁴⁸、涅槃寂静⁴⁹」という、仏教の基本的教義の四法印がすべて語られており、豊子愷がアーナンダを意識して「阿難」と命名した可能性は十分に考えられる。

仏教帰依式を受けて以来、豊子愷は弘一法師の影響をいっそう強く受けるようになった。立達学園の創設当時から知り合いで、豊子愷に『中国文学小史』、『童話概要』などの自著の装丁を依頼したこともある趙景深は、その様子を次のように記している。

当時（仏教に帰依する以前、大野注）、私は彼とどんな話をしたのか、今ではもう思い出すことが出来ない。

しかし、彼の態度が軽妙洒脱で、まるで心のままに広がる秋雲のようであったことを覚えている。

その後、ある時、子愷が開明書店に遊びに来たのだが、驚くべきことに、まったく別の子愷に変わっていた。彼は籐椅子に座ると、腰を筆のようにまっすぐにし、以前のように煙草をくわえて、心の赴くまま斜めに腰掛けたりはしなかった。両手はまっすぐに膝に置き、以前のように音楽のリズムをとるかのよう指で椅子を軽く叩くこともなかった。臉を落とした姿は禪定に入った老僧のようで、以前のように情のこもった瞳で来客を見ることもなかった。話をしてもこちらが問えば答えるが、向こうからは何も言わず、答える声は極めて低く、声には以前のような抑揚も変化もなかった。そう、夏丐尊が「この頃、子愷は李叔同に惑わされてしまった！」⁽⁵¹⁾と云うのを私もよく耳にしていた。

帰依の後、豊子愷の生活はすべて一変した。豊は弘一法師の指導に従い、毎日必ず礼拝をし、念仏を唱え、食生活も完全な菜食として、不飲酒戒を守った。豊子愷が仏教帰依から一年間、このような生活をおくったことについて、弘一法師は豊子愷宛ての手紙で「極めて喜ばしく、賛嘆に値します」と褒め称え、また「近来、貴君が諸事順調なのは、実に貴君が誠心誠意礼拝し、念仏を唱えているからです。念仏を唱えれば、どれほど多くの罪もすべて消え去り、無限の幸福を得ることが出来るのです」と念仏を推奨している。⁽⁵²⁾

豊子愷は帰依以前には、鶏肉や卵、蟹、バター、牛乳などは普通に摂っていたが、体質的な理由から豚肉や牛肉はもともと食べていなかった。そのため食生活上の変化は問題ではなかった。問題は不飲酒戒である。豊子愷は若い時から酒を好み、特に仏教に帰依する以前には「酒に迷ったこともあった」⁽⁵³⁾。そのため、不飲酒戒を守り始めた当初は、生活の楽しみが一つ減ったように感じたことすらあった。しかし、戒律を忠実に守った結果、一九三四年当時にはそ

れが楽しく感じられるようにさえた。⁽⁵⁴⁾

ところが、抗戦期に書かれた『教師日記』には飲酒の様子がしばしば記されており、一九三八年頃には豊が飲酒を再開、すなわち不飲酒戒を中止していたことがわかる。⁽⁵⁵⁾ また、豊子愷の末娘である豊一吟氏（一九二九年生）によると、豊子愷には念仏を唱える習慣は無かったという。豊子愷がいつ頃まで念仏を唱えていたか、詳細は不明であるが、飲酒の再開と併せて、一九三〇年代後半には既に礼拝や念仏を行っていなかった可能性が高い。こうした変化は、何を意味しているのだろうか。それは、豊子愷の信仰上の変化、あるいは弘一法師との仏教上の乖離と言えはしないだろうか。

第三節 『護生画集』第一集（一九二九年）

（一） 作成の経緯

一九二七年秋の仏教帰依式と前後して、弘一法師と豊子愷は『護生画集』の作成を計画した。当初は弘一法師の五〇歳を記念して、一集のみの予定で作成された。しかしその後、弘一法師から自分が何歳で亡くなるうとも、百歳に相当する年までは『護生画集』を一〇年毎に発行し、収録作品数を一〇幅づつ増やすよう依頼され、豊子愷は戦時中や文革期にも作成を続け、一九二九年から一九七三年まで四〇年以上の歳月をかけて全六集（計四五〇幅）を完成させた。作成が長期に及んだため、テーマも関係者も集によって異なっている。本節では『護生画集』第一集を中心に、

同書作成の経緯や意図、社会的反響について述べたい。

『護生画集』第一集は一九二九年に開明書店の専用印刷所である美成印刷公司以印刷され、開明書店や仏学書局、道德書局、華通書局、仏経流通所などで委託販売された。美成印刷会社とは開明書店の設立直後に、同書店店主、章錫琛の義弟の呉仲塩が設立した株式会社である。開明書店の出版物を専門に印刷し、編集部と印刷所が直接に連絡しあう関係であったため効率もよかったが、抗戦初期に爆撃を受け、その後は業務を停止した。『護生画集』第一集の作成費用は、弘一法師の出家以前から南洋公学や滬学会を通じて親交があり、出家後は法師の熱心な信者となった上海の豪商、穆藕初の寄付に拠るところが大きい。⁵⁶⁾

豊子愷と弘一法師は同書に版權を設けず、功德目的での複製を奨励したため、多くの寺院や仏教信徒が独自で印刷出版し、無料で配布した。⁵⁷⁾ 同書は、明清に大いに流行した勸善懲惡の書「善書」を想定して作成されたと考えられる。善書は社会倫理や道德の普及を目的に、士大夫から一般民衆まで広範な層を対象に、平易で通俗的な言葉で因果応報や勸善懲惡を説いた無償の刊行物で、宋代に始まったとされており、作成や刊行にあたっては当初から知識人や士人が中心的役割を担っていた。

さて、前述のように弘一法師は一九二七年秋に上海の豊子愷を訪れ、豊宅に一ヶ月程逗留した。その折、弘一法師は豊子愷や李石曾、周予同、葉聖陶ら数名を連れて、新聞太平寺に滞在中の印光法師を訪問している。⁵⁸⁾ 印光法師は浄土宗の高僧で、南山律宗の弘一法師とは宗派を異にするが、弘一法師は「当代の優れた高僧のうち私が最も服膺するのは、ただ印光法師だけです」と述べるなど、印光法師を非常に崇敬していた。⁵⁹⁾

印光法師が上海に滞在する際には、常に李円浄という資産家の居士が側近く仕えており、豊子愷は一九二七年の太

平寺訪問の際に李円浄と知り合いになった。李円浄は後に、豊子愷と弘一法師が『護生画集』の作成を計画していることを知ると、豊子愷を「道を同じくする友」として遇し、「護生画」を多く描くように励まし、自らも『護生画集』の構想に関わるようになった。⁽⁶⁾

ただし、弘一法師と豊子愷が作成について案を練り始めた当初は、まだ『護生画集』という名前ではなかった。弘一法師が一九二八年四月に豊子愷に宛てた手紙には「『戒殺』画の文字は是非書きたいと思います」と記されている。『護生画集』という名前が最初に出るのは、李円浄に宛てた一九二八年六月の手紙である。そこには「お手紙拝受けました。名前を『護生画集』とするのは、非常によいと思います。ただし、その下に小さく三文字、即ち「附文字」の三文字を書き足すと宜しいでしょう。(中略) そうすれば、絵と対照になっている文字や、貴方様の『護生痛言』もその中を含むことが出来ます。貴方様のお考えは如何でしょうか」と記されている。⁽⁶⁾

『護生痛言』とは李円浄が著述し、印光大師の鑑定を経た文章で、初期の『護生画集』には同文が含まれていた。『護生痛言』は単独でも出版されたが、その挿絵には『護生画集』の豊子愷の絵が使用されていた。⁽⁶⁾ 上述の弘一法師の六月の手紙には、『護生痛言』が既に脱稿との記載があることから、同書は『護生画集』に先立って出版されたようである。

以上から、豊子愷が仏教に帰依した一九二七年秋から翌春にかけて、弘一法師と豊子愷の間で、仏教信者の守るべき五戒の第一戒「不殺生戒」を題材とする画集の作成が検討され、そこに李円浄が加わり、自らの著作『護生痛言』にも通じる『護生画集』という名前を提案したと考えられる。もっとも、一九二八年八月の弘一法師の手紙には『戒殺画集』と『護生画集』の二つの名前が挙げられており、最終的に『護生画集』に確定したのは作成開始後のこと

ようである。⁽⁶³⁾

弘一法師の弟子で、豊子愷の生涯の友として『護生画集』第四集以降の作成を支援したシンガポールの広洽法師によると、『護生画集』第一集の作成にあたっては、まず上海の豊子愷が絵を完成させ、当時温州にいた弘一法師に送付し、法師は絵の内容に応じて題詞を配したという。⁽⁶⁴⁾ また弘一法師から豊子愷への一九二八年旧曆八月の手紙にも、李円浄と自分の考えは同じなので絵の選択は李円浄に任せ、決定後に自分に送付するようにと記されており、⁽⁶⁵⁾ 豊子愷から送られてきた絵に対して、描き直しや画題の変更を度々命じている。⁽⁶⁶⁾ 以上から、『護生画集』はまず豊子愷が絵を描き、それを李円浄が選択した後に弘一法師に送り、法師の指導にしたがって修正を加え、最後に弘一法師が題詞を付けるという手順が取られたようである。

本の装丁や用紙については、弘一法師から以下のように細かな指示が与えられた。

画集は中国製の紙に印刷すべきですが、表紙にはやはり西洋風のデザインを用いて、二色または三色の色刷りにしてもいいでしょう。糸綴じの装丁については、日本式にするつもりです。それはこのようなやり方で、〔図版三〕、糸で結ぶのです。これは中国の仏教經典の装丁とは違います。⁽⁶⁷⁾

弘一法師はなぜこれほどまでに、本の表紙や装丁にこだわったのだろうか。続きを見てみよう。

私が思うに、同書はまだ仏教を信奉していない、西洋文化の影響を受けた人々に重きを置くべきであり、そのような方々に広く寄贈したいと考えております。ですから、表紙と装丁は極めて斬新で、人の目を引くようなものでなければなりません。表紙を見れば、それが新式の芸術品であって、古めかしい勸善懲惡の本ではないとわかるようにすべきです。もし表紙が通常の仏教書と似ていたら、彼らは『護生画集』という書名を見ただけで、



図版3



図版4

通常の仏教書と同じだと考え、もう二度と本を開いて中身を見ることは無いでしょう。表紙と装丁が極めて斬新で、人の目を引くような美しいものであれば、本の内容が更に引き立ち、見る者の満足と喜びを惹き起こすことが出来るのです。中身の頁は中国製の紙を用いれば、地方でも同様に複製印刷することが出来るでしょう。⁽⁸⁾

弘一法師が『護生画集』(図版四)をモダンで美しい本にしようとしたのは、「まだ仏教を信奉していない、西洋文化の影響を受けた人々」に広く受け入れられることを願ったの故であった。では、弘一法師はなぜそうする必要があったのか。以下、当時の仏教界の状況を中心に、作成の背景を述べる。

(二) 作成の背景

『護生画集』の作成にあたり、弘一法師は特に「新派の知識階級(すなわち高等小学校卒業以上程度)」で、また「仏の教えを信じず、仏教書を読むのを好まない人」に見てもらうことを意図していた。それは「近来、殺生を戒める本は多いが、以上のような二種類の人が見るのに適した本は極めて稀」なためで、弘一法師はこうした人々が同書を見ると「その画法の斬新さに惹かれ、内容を学び、玩味して、手放しがたく、自然に殺生の戒めや、生き物の命を大切にすることが出来るようになり、善を行う心根が植え付けられる」と考えていた。一方で、弘一法師は「愚夫愚婦および旧派の士農工商」は、『護生画集』を見ても「極めてわずかの利益しか得られず、褒め称えることなど決して出来ない」ので、そのような人々のことは考慮する必要がないと述べている。⁽⁹⁾

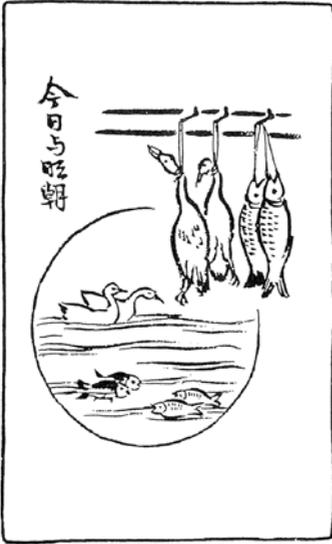
また「年長者や旧派の人間」については、彼らには「新しい美術の知識」がないので、豊子愷の絵が「精密ではな

く、顔に目鼻がなく、人の姿になっていないと言つて、必ずや不満に思う」であろうし、自分の書についても「雑で、殿試策問の体裁や格調にそぐわない」と言つて批判するであろうから、そのような人に『護生画集』を寄贈する必要はなく、仮に送るとしても、少しでよいと述べている。⁽²⁰⁾

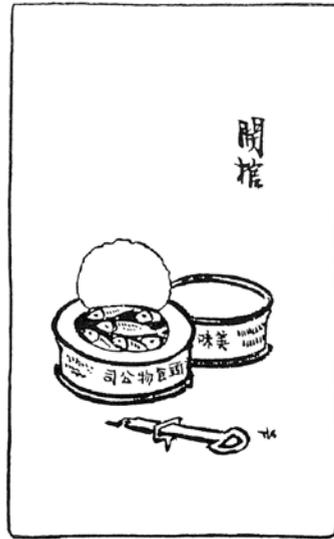
弘一法師はまた、「新派の知識階級」とそれ以外の人について、次のようにも述べている。

案ずるに、この画集は大衆向けの芸術品であり、優美で柔和な情緒を以て、見る者に物寂しさを哀しみ、哀れみを感じさせるべきで、芸術的価値を失つてはなりません。もし紙面に残酷な気が満ち、さらには画題に「棺を開ける」〔図版五〕、「首吊り」〔図版六〕、「見せしめ」〔図版七〕などの粗暴な文字が更に用いられると、見る者に嫌悪感や不快感を与えることになります。そのようなことはあつてはなりません。人の心を感動させるということについて言うならば、優美な作品は残酷な作品よりも更に深い感動を与えることが出来るでしょう。残酷な作品は一時的に猛烈な刺激を与えられるだけです。優美な作品はオリブを食べるように、いつまでも繰り返し味わうことが出来るのです。(これは、新教育を受けたことのある人々について言うのであつて、一般にはもっぱら残酷な作品を好むかもしれません。(後略)⁽²¹⁾)

弘一法師のこのような差別的とも思えるような発言の背景には、清末以来の仏教界に対する差別や偏見が存在している。弘一法師が、「愚夫愚婦および旧派の士農工商」が喜ぶような類の絵として、豊子愷に紹介した作品「夫婦喧嘩を阿闍梨が仲裁」〔図版八〕には、地面に座り込む僧侶と、困り顔の夫婦が描かれている。添えられた文章には、ある僧侶が夫婦喧嘩の仲裁に入ったものの、逆に夫に殴られたため、夫に謝罪を求めて大騒ぎをし、結局近隣の人間が間に入っておさまつたと記されている。⁽²²⁾



図版6



図版5

夫婦反目
閻黎解勸
儉抗謝公橋。屢民汪某。
昨日夫婦反目。正在互
相扭駁之際。適附近白
雲寺某僧過而見之。即
入內解勸。汪遂遷繫於
僧。德以老寧。僧坐地吵
鬧。堅欲汪某陪禮。嗣
經旁人勸出。始快快而
去。(阿婆)



図版7



図版8

当時、庶民の間で一般に信仰されていた仏教は、豊子愷が幼少時に体験したような、仏教と道教、民間信仰が融合したもので、人々は仏教に現世の利益を求めていた。弘一法師の言う「愚夫愚婦および旧派の士農工商」、「年長者や旧派の人間」とは、仏教を迷信的に信奉するか、あるいは仏教の本質を知ろうともせず、仏教は迷信であり、僧侶は腐敗した愚か者であるとして仏教を否定、排斥する人々であった。一方、「新派の知識階級」とは西洋式の近代学問に触れた人々、つまり物事を理性的に判断できる人々であるから、仏教の教義を知り、正しく理解しさえすれば、信者として善行を積むようになるであろうと、弘一法師は期待したのである。

では、当時の仏教界をめぐる状況はどうであったのか。以下、簡単に見ておきたい。一八九八年に張之洞が『勸学篇』を著すと、当時頹廢の極みにあった仏教寺院の土地や建物を没収して学校に転用し、教育を興そうという廟産興学の風潮が盛んになった。また清朝政府も一八九五年から一九〇四年にかけて、宗教団体などの民間結社を禁じた。こうして仏教界への迫害が激化する中、危機意識を抱いた僧侶や仏教関係者らは仏教界の組織化や教育施設の設立に着手するようになった。楊文会の仏学研究会もこうした状況下に創設されたものである。また仏教会、仏教大同会、中華仏教協進会などが続々と結成され、一九一二年には中華仏教總會が結成された。

ところが、辛亥革命後の新しい社会に仏教は不要であるという社会風潮を背景に、中華仏教總會は袁世凱政権によって一九一五年に活動停止とされた。その後、中華仏教界と改称して存続を図ったが、一九一八年には解散に追い込まれた。また五四新文化運動期には、迷信打倒運動や反宗教運動が展開され、仏事や民間の宗教儀礼は迷信であるとして、各地で寺院に対する破壊活動が行われた。李叔同が出家したのは、まさにこのような時代であった。それまで西洋音楽や美術、演劇など、新文化の伝播者として知られていた李叔同の出家が、当時の知識人に与えた衝撃と反発の

大きさが想像できよう。

仏教に対する偏見と迫害はその後も続き、一九二七年には第二次廟産興学の動きが興った。一九二九年には南京政府が「寺廟管理条例」を公布して廟産興学を支持するなど、仏教界の危機的状況は続いた。⁽²⁴⁾ 仏教界への迫害は弘一法師の日常にまで影響を及ぼすようになり、日頃から法師の健康状態を心配していた夏丐尊、経亨頤、豊子愷、劉質平、穆藕初、朱鮮典、周承徳の七名は、浙江省白馬湖に弘一法師のための寓居「晚晴山房」を建設した。彼らはまた夏丐尊を中心に「晚晴山房護法会」を結成し、弘一法師の必要とする薬品や文房四宝、地方行脚の費用なども負担した。尚、弘一法師は一九二九年旧暦八月二七日に晚晴山房に移ったが、翌一九三〇年一月からは国民党兵士の乱入が続いたため、実際に「晚晴山房」に住んだ時間はあまり長くはない。⁽²⁵⁾

さて、弘一法師による『護生画集』第一集跋文には、「芸術を教化の方便とする」と記されている。⁽²⁶⁾ 上述のように、『護生画集』の装丁や絵は弘一法師の指導の下、豊子愷が担当した。当時、豊子愷の漫画は開明書店の出版物や、『文学週報』などの雑誌を通じて、新興市民階級、特に近代教育を受けた知識青年を中心に広く人気を博していた。豊子愷の絵は「新派の知識階級」を『護生画集』に惹きつけるのに、十分な魅力を有していたことであろう。

その一例が、抗戦期に上海に出現した「次愷」である。「次愷」が『申報』に投稿する漫画（図版九）は、絵ばかりか、作風まで豊子愷に酷似しており、豊子愷自身も我が作品かと思紛うばかりであった。その後、判明した情報によると、「次愷」はまだ若い学生で、豊子愷の絵を学ぶようになったのは『護生画集』に感化されたことであつた。⁽²⁷⁾

弘一法師らが『護生画集』を作成していた当時、都市部ではまさに「新派の知識階級」が形成されていた。これについて陳思和は、一九三〇年代の中国の都市には「知識分子のエリート文化と、エロティシズムを追求する野卑な文



図版9

化との間には、他に「高雅な」生活興趣を追求する大量の市民階層の文化が存在していた」と述べている⁽²⁸⁾。豊子愷は、自分の漫画や散文の愛好者は「資本主義的な商業大都市」の「大衆」であると認識していたが、それは換言するならば、都市の新興大衆あるいは中間市民階層である。彼らは一定の経済力と知識水準を有し、独自の文化や精神面での満足、すなわち「高雅な」生活興趣」を追求していた。

当時『護生画集』の作成に直接関係した豊子愷や李円浄、協力者の夏可尊らが生活し、また出版の基盤でもあった上海は、第一節で論じたように都市大衆文化が最も栄えた地域である。経済的繁栄を背景に、上海では初等・中等教育の普及率も高かった。例えば、一九三〇年の上海の義務教育就学率は五七・九%、中等教育機関の在校生数は三万一千九四二名（全国第六位）である。同時期、北京では高等教育機関の在校生数は上海とほぼ同水準であったが、義務教育就学率は一六・五%、中等教育機関

の在校生数は一万七千二六五名（全国第一三位）と低い⁽⁸⁰⁾。上海には、経済力と中等以上の教育水準を有する新興都市大衆が存在し、近代的市民社会が形成されつつあったのである。

(三) 内容とテーマ

次に、『護生画集』第一集の内容について見てみたい。弘一法師は前述の跋文にて、同書は「人道主義を宗旨とする」と述べているが、ここで言う「人道主義」とは、具体的には不殺生と放生を指している。放生とは生き物を解き放つて自由にすることであるが、殺生や肉食の戒め、慈悲の実践として行われることが多い。

同書の最初の作品「衆生」⁽⁸¹⁾〔図版一〇〕には羊の群れと羊飼いが描かれているが、それに弘一法師は次のような題詞を配している。

是亦衆生 与我体同（これもまた衆生である 私とその実体は同じである）

応起悲心 憐彼昏蒙（まさに慈悲の心を起こして 衆生の愚昧さを憐れむべきである）

普勸世人 放生及戒殺（世の人々に普く勧める 放生と不殺生を）

不食其肉 乃謂愛物（その肉を食さず それはすなわちその生き物を愛することである）⁽⁸²⁾

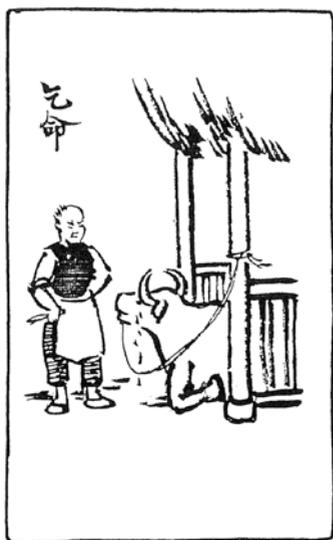
『護生画集』第一集に収められた五〇幅の作品のうち、約八割が放生と不殺生に関するものである。しかもその多くが、包丁を手にした人間に泣きながら命乞いをする牛を描いた「命乞い」〔図版一一〕や、何も知らずに肉屋へ連れて行かれる羊を描いた「もしも羊が字を知っていたならば……」⁽⁸³⁾〔図版一二〕など、肉食を題材とした作品である。

『護生画集』解題（一）——豊子愷の仏教婦依から第一集まで



是亦眾生 與我體同
 應起悲心 憐彼昏蒙
 普勸世人 放生戒殺
 不食其肉 乃謂愛物

圖版10



吾不忍其斃 殊
 無罪而就死地
 普勸諸仁者
 同發慈悲意

圖版11



尚使羊識字
淚珠落如雨
口雖不能言
心中暗叫苦

図版12



豎目操身豎
甘人者勇關
從欲若智權
運哉肉世界
一豎當芒居
万人揮而走
乃人集克心
物令誰管救
其言他肉肥
多廢吾身瘦
彼此當盡令
但當相憫有
共修三堅法
人獸兩幸負
明因用望詳

図版13



図版14

これらに配された題詞には無辜の動物の苦しみと哀しみ、そして慈悲心を持つことの重要さが説かれている。また「肉」〔図版一三〕、「修羅」〔図版一四〕のように屠殺場面そのものを描いた作品もある。弘一法師はこの二作品の分かりやすさを好んだのか、豊子愷に対してこの二作を連続して収録し、題名も「修羅一」、「修羅二」に変更するよう提案している。⁽⁶⁾

また放生および不殺生をテーマとした作品の中には、児童の遊戯や釣り、狩猟などを題材とした作品も数点含まれている。これらの作品の絵は穏やかであるが、その題詞に詠まれているのは、ほかの作品と同様に生き物の苦しみと、人々が慈悲心をもつことへの願いである。

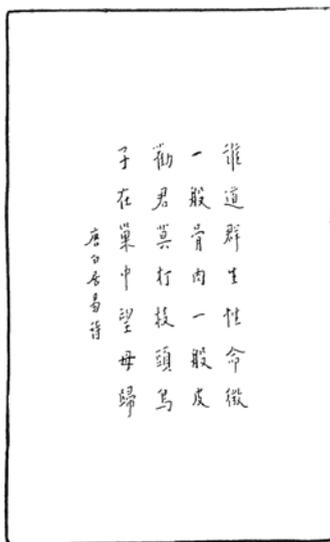
仏教では基本的に人為的殺戮を前提とする供犠とその食肉を禁止しており、不殺生戒の観点に立った場合、肉食は本来すべて禁じられるべきである。しかし在家信徒に対しては、動物の殺されるところを直接に見聞きしていない場合はその肉を「浄肉」と称するなど、一定の条

件の下での肉食は認められる。この背景には、肉食という行為そのものよりも、動物に痛みや苦しみを与え、それを直接に見聞きすることの方が罪深いという考えがある。弘一法師も、南社時代の友人で仏教に関心を抱いていた姚石子に宛てた手紙で、もし肉食をするのであれば、生きたまま買ってきて家で殺すのではなく、市場で処理してある肉を買ってくるべきであり、そうすれば肉食の罪はかなり軽減されると述べている。⁽³⁷⁾

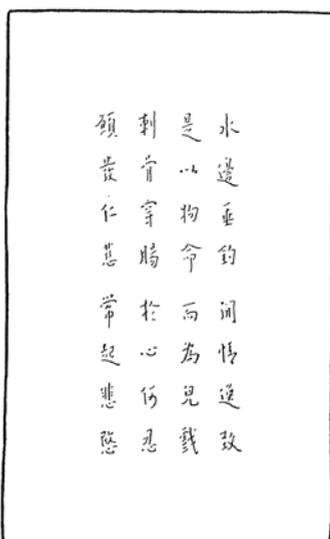
釣りや狩猟は、自ら手を下して動物を殺害することであり、上述の仏教的観点からすると、その罪は重い。これらの作品に敢えて「暗殺」〔図版一五〕や「おびき寄せて殺す」〔図版一六〕などの恐ろしいなタイトルを付けたのは、読者の注意を特に喚起したいとの理由からであろうか。

不殺生と放生という考え方の根底には、すべての行為「業」は死後も潜在的な力として残存し、その人の来世の善悪のあり方を規定するという因果応報の思想が存在する。これに基づいて、弘一法師は通常の説教でもしばしば不殺生と放生を説いた。その一例として、弘一法師が一九三三年に泉州大開元寺で行った講演「放生と殺生の果報」⁽³⁸⁾の内容を見てみたい。法師は初めに、魚を逃した人が九八歳まで長生きした話や、全財産をかけて放生をした人の病が全治した話、昼食に供される筍の鶏の命を救った人が後にその鶏に命を救われた話など、因果応報の例をいくつか挙げ、放生には「長生き」、「病氣治癒」、「災難を逃れること」、「子孫を得ること」、「極楽往生」などの良い報いがあり、殺生にはその反対の「短命」、「多病」、「多難」、「子孫に恵まれないこと」、「地獄や餓鬼、畜生に堕ちること」⁽³⁹⁾などの悪い報いがあるので、聴衆は放生を行い、殺生を徹底的に改めると同時に、また周囲の人々にも殺生をしないように勧めるべきだと述べている。⁽⁴⁰⁾

弘一法師は因果応報という觀念から、放生と不殺生を熱心に提唱したが、その背景には印光法師の教えがある。前



圖版15



圖版16

述のように、弘一法師は印光法師を非常に崇拜しており、姚石子への手紙でも印光法師は当世第一の高僧であり、品格は高潔で厳格であると絶賛している⁽⁹¹⁾。印光法師は本来、出家した僧侶を弟子としない主義であったが、『印光法師文鈔』に感動した弘一法師は弟子入りを哀願し、一九二四年にその願いが許され、浙江省普陀山で印光法師と七日間生活をともにした。弘一法師はその経験を基に、後に「略述印光大師の盛徳」と題する講演を行ったが、その中で印光大師が生涯で最も重んじたのは因果応報であると述べている⁽⁹²⁾。弘一法師は崇敬する印光大師の教えに従い、自らも因果応報と不殺生を人々に説いたのである。

前述のように、『護生画集』第一集には当初「護生痛言」（李円浄著述・印光法師鑑定）が付いていたが、その内容はまさに不殺生と放生の提唱である。この文章ならびに印光法師自身が記した『勸戒殺放生文』序」には、不殺生と放生を勧める理由として、因果応報に加えて、輪廻転生する生き物はすべて、仏となる本性を有するという点において平等であるという考え（一切衆生悉有仏性）も記されている。ここにいう仏とは、法を悟り、法を説く者で、完全な智慧と慈悲を有する存在と考えられる。

『勸戒殺放生文』序」で、印光法師は次のように述べている。

そもそも人と諸々の生き物は、同じく天地の化育を受けて生じ、同じく血の通う肉体を賦与され、同じく靈妙なる智慧の性を有する。同じく生に執着し、死を恐れ、吉に向かい凶を避ける。一族の団欒は喜びであり、離散は悲しみである。恩恵を受ければ恩義を感じ、苦しみが残れば恨みを抱く。すべて悉く同じである。如何せん、諸々の生き物は過去世での悪しき業のために畜生に墮ちたのである。姿形は人と異なり、ものを言うこともできない。（中略）なぜその姿形が人と異なり、知力が劣るからといって、食べ物と見なすことが出来るのか。自ら

の知力や財力を以てそれを捕まえ、捌いて、焼いたり煮たりという極めて苦しい思いをさせ、いつとき自分の口を悦ばせ、腹を充たすという喜びを為すことが出来るのか。⁽⁹³⁾

印光法師は続けて、以下の黄庭堅の詩を引用しているが、弘一法師も『護生画集』第一集でその詩の前半部分を用いている。

我肉衆生肉（我が身と衆生の身）

名殊体不殊（名は異なれども その実体は同じである）

本是一種性（元々、同じく仏となる可能性を秘めたもの）

只為別形軀（ただ姿形が異なるだけなのだ）

この詩に配された豊子愷の絵には、見つめあう人と犬の姿が描かれ、「平等」というタイトルと、「それは平等な者の瞳である」というツルゲーネフの言葉が添えられている〔図版一七〕⁽⁹⁴⁾。

印光法師や弘一法師の説く不殺生や放生、因果応報の根底には「一切衆生悉有仏性」という仏教哲理が存在する。しかし、仏教は非科学的であるという理由で否定されていた当時、弘一法師の名声や豊子愷の漫画を以てしても、「新派の知識階級」に因果応報の思想を理解してもらおうのは、決して容易なことではなかった。そこで彼らが利用したのが、当時ヨーロッパで流行していた菜食主義と動物愛護運動である。例えば、「農夫と乳母」〔図版一八〕と題された絵に、弘一法師は次のような題詞を付けている。

憶昔襁褓時 嘗啜老牛乳（昔、襁褓をしていた時を憶う 年老いた牛の乳を味わい啜ったことを）

年長食稻粱 頼爾耕作苦（成長してから稲粱を食す 耕作の苦しみをお前に任せながら）



我肉眾生肉
名殊體不殊
原同一種性
只是別形軀

宋黄庭坚诗

図版17



憶昔襍穡時 嘗啜老牛乳
并長食稻粱 賴尔耕作苦
念此養育恩 何忍相忘汝
西方之學者 倡人道主義
不啻老牛肉 凌泊樂蔬食
予哉此美風 可以昭百世

図版18

念此養育恩 何忍相忘汝 (この養育の恩を想えば どうしてお前を忘れられようか)

西方之学者 倡人道主義 (西洋の学者は 人道主義を唱え)

不啖老牛肉 淡泊樂蔬食 (年老いた牛の肉を食はず 無欲にして素食を楽しむ)

卓哉此美風 可以昭百世 (素晴らしきかな、この美風 百世に知らしめん)⁽⁹⁵⁾

また、一九三四年に飛鵬芸術社から出版された『護生画集』や、『弘一大師法集』に収録された『護生画集』には世界保護動物日やロンドン菜食主義会、動物保護新運動などに関する記述が附録として付いている。⁽⁹⁶⁾

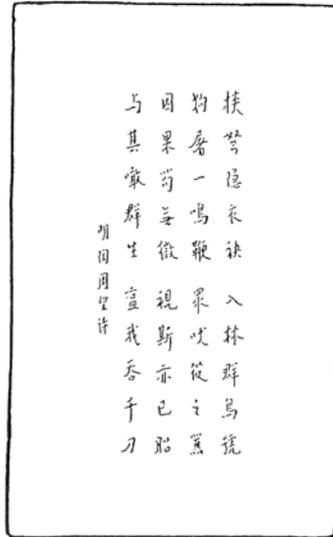
(四) 社会的反響と批判

『護生画集』第一集に対する社会的反響は大きく、特に仏教界では多様な版本が作られた。一説には一五版以上の種類があり、各版本の出版数は少ない場合で千五百冊、多い場合には五千冊とも言われている。また英訳本も数種類出版された。⁽⁹⁷⁾

しかし、同書には非科学的な内容が多く、豊子愷や弘一法師らに対して批判的なグループからは格好の攻撃理由とされた。例えば、豊子愷の第一師範の後輩にあたる柔石は『萌芽月刊』第一卷第四期(一九三〇年四月)に「豊子愷君の飄然たる態度」と題する文章を発表し、『護生画集』および豊子愷を次のように批判した。

豊君は自作の『護生画集』を自賛しているが、私はむしろこの本の中に彼の言説の出鱈目さと浅薄さを見出す。

ある一幅の絵で、彼はハムを提げている人の側で、一匹の豚が「私の足！」と眩く所を描いている〔図版一九〕。



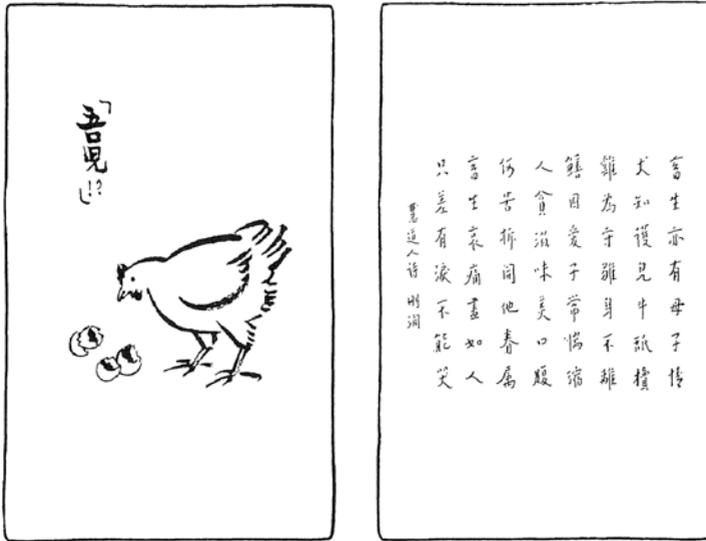
図版19

扶筇憶衣袂 入林群鳥繞
 狗唇一鳴鞭 果咬從之驚
 因果苟無徵 視斯亦已昭
 与甚家群生 宜我吞千刀

明因月望詩

豊君は菜食のほかにも卵も食べるそうである。それならば、豊君はなぜ卵を食べている人の側で、鶏が「私の卵」と呟く絵を描かないのだろうか（図版二〇）⁽⁹⁸⁾。この例だけからでも、豊君の思想と行為の嘘と矛盾、そして彼のすべての議論の価値を証明することができ⁽⁹⁹⁾る。

柔石はまた上記引用文の前半で、豊子愷が『中学生』第二号（一九三〇年二月）に発表した散文「梅の花から美について語る」と「梅の花から芸術について語る」を取り上げ、豊の言わんとすることは結局、梅の花を見に行くように、学生や青年に勧めているだけだと批判している。柔石はまた、豊子愷の文章について「彼は古人ではないかと疑った程で、林逋や姜白石が白話で文章を綴ることが出来ようになったのかとさえ思った」と揶揄している。しかし、豊子愷は上記二篇の散文で、美や芸術の本質について論じており、決して柔石の言うように梅の花の観賞だけを提唱している訳ではない。柔石は、豊



図版20

子愷は「呉昌碩の梅花図の前で低徊し、吟味するのを最も好む」のだから、梅の花を觀賞するのは「豊君の自由」だが、学生はむしろ「多少社会に入っていくべきであり、彼らが社会の核心について多少研鑽すれば、状況は多少よくなるだろう」、そして学生も水上生活者の苦境やアメリカ人水兵の横暴などの現実を知れば「多少は気骨もできて、豊君があゝの二篇の文章を書いた時のように飄然とした態度ではいられないだろう」と厳しい言葉を記している。

柔石は上記の文章で、夏丐尊が『中学生』創刊号（一九三〇年一月）に発表した散文「自分を知らねばならない」からも数箇所引用し、夏丐尊が自分自身や中学生を「中産階級」と認識していることを鋭く批判した。柔石の文章が掲載された『萌芽月刊』第一巻第四期には、連桂「夏丐尊の処世と指導」と題する夏丐尊への批判文が掲載されているが、その付記には「夏丐尊先生は開明書店発行の『中学生』雑誌の編集主幹である。彼が代表

する一派（すなわち立達学園を基本とする『一般』一派）の処世と教育の態度は青年にかなり影響を及ぼしているの
で、青年に関心のある皆さんが注意されんことを希望する」とある^(四)。

柔石の批判は豊子愷個人に対してというよりも、連桂の言うところの「『一般』一派」、即ち夏丐尊や豊子愷が所属
していた立達学会や開明同人全体に向けられたものであり、そのきっかけとして豊子愷の菜食主義や『護生画集』が
利用されたのであろう。また逆に言うならば、これらの批判や攻撃は、夏丐尊や豊子愷はじめ、立達学会や開明同人
の青年知識層に対する影響力の大きさの表れとも言えよう。

また『護生画集』第一集をめくり、豊子愷は第一師範時代の友人で、卒業後も開明書店を通じて交際が続いていた
曹聚仁と一年以上論争を続け、終には二人の交際は生涯断絶した。これについては、『護生画集』第二集の内容とも
関係するため、小論では述べない。

おわりに

一九三八年秋、弘一法師は『護生画集』の題詞の書きなおしと再版を決意した。絵は上海の居士林図書館に保存し
てあった原稿本を利用するつもりでいたが、戦火で焼失したため、上海仏学書局が以前に出版した英訳版の絵が利用
され、一九三九年七月に同書局から再版された^(四)。弘一法師はまたこれと並行して、豊子愷とともに『護生画集』第二
集（全六〇幅）の作成も開始した。この頃、法師と豊は今後一〇年ごとに『護生画集』続編を出版し、各集出版時の
弘一法師の年齢にあわせて収録作品数を第一集（五〇幅）から順次増やし、第六集（百幅）まで続ける計画を立てた。

これは、『護生画集』全六集が普及すれば、その功德と利益も世間に広まると弘一法師が考えたためである。⁽¹⁰⁾

一九三九年旧曆九月、豊子愷は『護生画集』第二集の絵の草稿を完成させた。題詞は第一集と同様、弘一法師に配してもらう予定であったが、法師は病気のため文字の書写だけを担当することとなり、題詞の作成と選択は法師の指導の下、豊子愷が担当した。⁽¹¹⁾当時、豊子愷と弘一法師はそれぞれ戦禍を逃れて江西省宜山と福建省泉州に滞在していたが、第二集の序言を執筆した夏丐尊は上海におり、第二集は一九四〇年一月に上海の開明書店や仏学書局などから出版された。

『護生画集』第二集は第一集と異なり、放生や戒殺を題材とする凄惨な作品はなく、衆生平等や万物共存を題材とした作品がほとんどである。第一集と第二集の相異について、夏丐尊は『護生画集』第二集序言⁽¹²⁾で以下のように述べている。

二集（『護生画集』第一集・第二集、大野注）には一〇年の隔たりがあり、子愷の作風は次第に自然に近づき、弘一法師もまた、人も書も老成した。二集の内容と趣旨には更に大きな相違がある。第一集で取り上げた境地の多くは、人の心を痛ましめ、最後まで見るに忍びないものであったが、第二集では凄惨で罪過に満ちた場面は一つも無い。そこに表現されているのは、万物が何物にも束縛されることなく心のままに楽しむという趣旨と、互いに心が通じ合い共感しあうという姿で、本を開くと詩趣が満ち溢れ、これが勧善の書とは信じがたい程である。思うに第一集では虚妄を斥けること、すなわち戒殺に重きが置かれていたが、第二集では正しい道理を明らかにすること、すなわち護生に重きが置かれている。戒殺と護生は、同じ善行の両面である。戒殺が方便となつて、はじめて護生が結果となるのである。⁽¹³⁾

この二集の相違が如何なる要因によるのか、その間に弘一法師と豊子愷に如何なる変化が生じたのか。これらの問題も含めて、第二集以後の内容については、稿を改めて述べたい。

1 蔡元培「全国臨時教育会議開会詞（一九二二年七月一〇日）」、中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第二卷、一九九七年、一七七—一七八頁。尚、これは全国臨時教育会議第一次総会の開会演説で、題目が無かったため、蔡元培著・孫常焯編『蔡元培先生全集』（台湾商務印書館）では、孫徳中の付けた題目「對於教育宗旨案之説明」を用いている（本田秋五郎『近代中国教育史資料 民国編上』一九七三年、日本學術振興会、五七〇—五七一頁所収）。

2 南北和議により統一政府が成立すると、北京にあった清朝「学部」は教育部に接収され、教育次長の範源濂や普通教育司長の袁希濤、参事の馬隣翼など、多くの専門家が「学部」から教育部へ転じた。尚、これに加えて、当時の教育部の特徴として、範源濂や秘書長の董鴻禕、魯迅、許寿裳、錢稻孫など日本留学経験者が多かったことも挙げられる。本田秋五郎、前掲『近代中国教育史資料 民国編上』四九—五一頁。

3 舒新城編『中国近代教育史資料 上册』人民教育出版社、一九六一年、二二六頁。

4 李叔同の出家以前の活動については、拙論「弘一法師（李叔同）と日本——清末から民国期の中日文化交流の一例として」『東洋文化研究所紀要』（第一六〇冊、二〇一一年二月）を（参照いただきたい）。

5 豊子愷「李叔同先生的教育精神」、豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』（以下『豊文集』）第六卷、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九六年、五四—一五四二頁。

6 豊子愷「為青年説弘一法師」、同上『豊文集』第六卷、一四九頁。尚、豊子愷「旧話」、『豊文集』第五卷、一八四頁にも同様な逸話が記されている。

- 7 經亨頤「戊午暑假修業式訓示」（一九一八年七月）、經亨頤著、張彬編『經亨頤教育論著選』人民教育出版社、一九九三年、一五七—一五八頁。Ye, Wen-hsin. *Provincial Passages—Culture, Space, and the Origins of Chinese Communism*. Berkeley, University of California Press, 1996, p.84.
- 8 蔡元培「以美育代宗教說」、中國蔡元培研究会編、前掲『蔡元培全集』第三卷、五七—六四頁。
- 9 豐子愷「山水間的生活」、前掲『豐文集』第五卷、一五頁。
- 10 豐一吟「瀟洒風神 我的父親豐子愷」華東師範大學出版社、一九九八年、八一—九頁。
- 11 豐子愷「放焰口」、「四軒柱」、前掲『豐文集』第六卷、七二九—七三三頁、七三六—七四一頁。
- 12 蔡元培、前掲「以美育代宗教說」五七—六四頁。
- 13 豐子愷「法味」『一般』第一卷第二号（一九二六年一〇月号）二五—二五三頁。
- 14 豐子愷「樓板」、前掲『豐文集』第五卷、一三一頁。
- 15 豐子愷「隨感五則」『一般』第二卷第二号（一九二七年二月五日号）、二六三頁。
- 16 豐子愷、前掲「法味」二六〇—二六一頁。
- 17 邵洛羊「挑灯風雨夜 往時從頭說 懷念豐子愷先生和他的漫画」、鐘桂松・葉瑜蓀編『寫意豐子愷』浙江文芸出版社、一九九八年、六九頁。
- 18 豐子愷「致夏宗禹 一九一九四六年二月七日、前掲『豐文集』第七卷、四一—五頁。
- 19 陳明遠『文化人与錢』百花文芸出版社、二〇〇〇年、七三—七八頁。
- 20 藤井省三『二〇世紀の中国文学』放送大学教育振興会、二〇〇五年、七六—七七頁。
- 21 同上、七八頁。
- 22 當時の上海の繁栄と百貨店については、菊池敏夫『民国期上海の百貨店と都市文化』（研文出版、二〇一二年）に詳しい。

- 23 島津四十起編『上海案内 第一版』日本堂書店、一九二七年、一〇六頁。
- 24 工部局交響楽団については、榎本泰子『上海オーケストラ物語 西洋人音楽家たちの夢』（春秋社、二〇〇六年）に詳しい。
- 25 豊子愷「修斐尔德百年祭過後」、前掲『豊文集』第一卷、二八八頁。
- 26 豊子愷「送阿宝出黄金時代」、同上『豊文集』第五卷、四四七—四四八頁。
- 27 豊子愷、前掲「法味」二五四頁。豊子愷「戎孝子和李居士」、同上『豊文集』第六卷、六八六頁。
- 28 豊子愷「湖畔夜飲」、同上『豊文集』第六卷、三八三—三八四頁。
- 29 陳明遠、前掲『文化人与錢』七四頁、七六頁。
- 30 豊一吟、前掲『瀟洒風神 我的父親豊子愷』一〇〇頁。
- 31 榎本泰子、前掲『上海オーケストラ物語 西洋人音楽家たちの夢』一六二頁。
- 32 豊一吟、前掲『瀟洒風神 我的父親豊子愷』九—九三頁。
- 33 同上、一〇九頁、一一三—一六頁。
- 34 飛輪について詳細は不明。当時、上海で流行していた乗り物あるいは娯楽の一種と考えられる。
- 35 豊子愷「剪網」、前掲『豊文集』第五卷、九三頁。
- 36 島津四十起編、前掲『上海案内 第一版』三五〇—三五二頁。
- 37 豊子愷、前掲「剪網」九四—九五頁。
- 38 豊子愷「老汗鍋」、前掲『豊文集』第六卷、六九五頁。
- 39 広学会とは一八八七年にスコットランド人伝教師 A. Williamson が同文書会として創設した出版社で、一八九四年に広学会と改称した。文字による伝道を目指す諸教派が参加していた。初期には非宗教的な書物の出版が半数以上であったが、一九二七年以降は信徒を主要な読者対象とすべく、出版趣旨を変更した。張化『上海宗教通覽』世紀出版集團・上海古籍出版社、二

『護生画集』解題（一）——豊子愷の仏教婦依から第一集まで

〇〇四年、四九二—四九三頁。

40 豊子愷「縁」、前掲『豊文集』第五卷、一五四—一五六頁。

41 豊子愷が仏教に帰依した年度については一九二六年、一九二七年、一九二八年の三つの説がある。これは、弘一法師がこれらの年に上海を訪問し、後半の二回は豊子愷宅に逗留したためである。現在では、豊子愷が帰依を受けたのは一九二七年の豊の誕生日とするのが定説となっており、本稿でも同日を帰依日とする。尚、豊子愷の姉の豊満も同時に帰依式を受け、弘一法師から夢忍という法名を授けられた。殷琦「豊子愷の皈依仏教及縁縁堂命名的時間考証」『中国現代文学研究叢刊』一九八七年第一期、一九八七年二月、二四九—二五一頁。

42 夏丐尊「弘一法師之出家」『平屋之輯』（『夏丐尊文集』第二卷）浙江人民出版社、一九八三年、二四六頁。

43 阿難は死産であったが、医者や豊子愷の見守る中、心臓が一度だけ動き、同時に四肢も一度だけ動いた。

44 豊子愷「阿難」、前掲『豊文集』第五卷、一四六—一四八頁。

45 同上、一四六頁。

46 この世のすべての現象は変化して止むことがなく、人間存在を含むすべてが瞬時たりとも同一ではありえないこと。

47 仏教の「苦」には、「苦苦（肉体的苦痛）」、「壞苦（損失による精神的苦痛）」、「行苦（悟りをひらく以前の迷いの苦しみ）」という三種が存在する。

48 「諸法」とは我々の認識の対象となるすべての存在を意味し、「我」とはある存在をそのものたらしめている永遠不変の本質を意味する。つまり自分自身を含む、すべてのものは、直接的あるいは間接的に様々な原因（因縁）が働くことで初めて生ずるのであり、そこには何ら実体的なものも存在しない。したがって、我々が自己として認識しているものも、また実体的ない存在であり、自己に対する執着は空しく、誤りであるとされる。

49 煩惱の炎の吹き消された悟りの世界（涅槃）が、静かで安らぎの境地（寂靜）にあること。

- 50 仏教では、無言の状態を保つことは「無言の行」（「無言戒」）として修行徳目に数えられる。
- 51 趙景深「豐子愷和他の小品文」『人間世』第三〇期、一九三五年六月二〇日、一四頁。
- 52 釈弘一「致豐子愷 一〇」（一九二八年旧曆九月二日）、『弘一大師全集』（修訂版）編輯委員會編『弘一大師全集』（修訂版）第八冊、福建人民出版社、二〇一〇年、三七〇頁。
- 53 豐子愷『教師日記』万光書局、一九四六年、六四頁（一九三九年一月一五日）。
- 54 豐子愷「素食以後」、前掲『豐文集』第五卷、四〇〇頁。
- 55 飲酒に関する最初の記載として、一九三八年一月二日の日記に「午餐に茅苔酒を飲む。味、甚だ美し」という文が見られる（豐子愷『教師日記』「宇宙風（乙刊）」（第一八期、一九三九年二月一日、七六七頁）。その後も、しばしば飲酒の様子が記されている。尚、Barnéは、豐子愷は一九三〇年代初期には既に飲酒を再開していたと記しているが、その根拠は明示されていない。Barné, *Geremie. An Artistic Exile: A Life of Feng Zikai (1898-1975)*. University of California Press, 2002, p.174.
- 56 林子青編著『弘一法師年譜』宗教文化出版社、一九九五年、一一八—一二〇頁。穆藕初「藕初五十自述」李平書・穆藕初・王曉籟『李平書七十自叙 穆藕初五十自述 王曉籟述録』上海古籍出版社、一九八九年。
- 57 例えば、以下の『護生画集』後付には「歡迎翻印」、「歡迎重印」と印刷されている。弘一法師題字・豐子愷作画『護生画集』光明社、一九三〇年（第二版）。同、飛鵬芸術社、一九三四年（重印）。同、中国保護動物会、一九三四年（第三版）。また陳無我は『護生画集』寄贈の記事を新聞で見て入手したという（陳無我「話旧」、余涉編『漫憶李叔同』浙江文芸出版社、一九八八年、二二頁）。
- 58 葉聖陶「両法師」『葉聖陶散文 甲集』四川人民出版社、一九八三年、一八六—一九〇頁。
- 59 釈弘一「致王心湛 三」（一九二四年旧曆二月四日）、前掲『弘一大師全集』第八冊、三三二頁。
- 60 豐子愷、前掲「戒孝子和李居士」六八六頁。

『護生画集』解題（一）——豐子愷の仏教婦依から第一集まで

- 61 釈弘一「致李円浄 一」(一九二八年六月一九日)、前掲『弘一大師全集』第八冊、三七六頁。
- 62 李円浄著述、印光法師鑑定『護生痛言』一九三〇年(第九版)。
- 63 釈弘一「致李円浄 二」(一九二八年八月三日)、前掲『弘一大師全集』第八冊、三七七頁。
- 64 釈広洽『護生画集』第六集序言、豊陳宝等編『豊子愷漫画全集』第一二巻、京華出版社、一九九九年、四七二頁。豊子愷には同一編者・出版社による漫画全集が二種類ある。一つは一九九九年版(全二六巻)で、もう一つは二〇〇一年版(全九巻)である。小論では一九九九年版を用いる。
- 65 釈弘一「致豊子愷 四」(一九二八年旧暦八月二四日)、前掲『弘一大師全集』第八冊、三六六頁。
- 66 釈弘一「致豊子愷 六・七・八・九・一〇」(一九二八年旧暦八月二二日・旧暦八月二四日・旧暦八月二六日・九月四日・旧暦九月二日) 同上三六七―三七〇頁。
- 67 釈弘一「致豊子愷 四」(一九二八年旧暦八月二四日) 同上、三六六頁。
- 68 同上。
- 69 釈弘一「致豊子愷 一〇」(一九二八年旧暦九月二日) 同上、三七〇頁。引用文中の()は原文に拠る。
- 70 釈弘一「致李円浄 二」(一九二八年八月三日) 同上、三七七頁。
- 71 「首吊り(原題——懸梁)」は弘一法師の提案により、「今日と明朝(原題——今日与明朝)」と解題された。釈弘一、前掲「致豊子愷 六」、三六七―三六八頁。
- 72 釈弘一「致李円浄 四」(一九二八年旧暦八月二二日) 同上、三七八頁。
- 73 釈弘一、前掲「致豊子愷 一〇」、三七〇頁。
- 74 末木文美士・曹章祺『現代中国の仏教』平河出版社、一九九六年、三〇―三二頁。
- 75 釈弘一「致豊子愷 一一、一二」(一九二九年旧暦八月二九日、一九三〇年五月)、「致夏可尊 二〇、三四」(一九三〇年正

月晦日、立春後一日）、前掲『弘一大師全集』第八冊、三七〇—三七二頁、三〇八頁、三二二頁。

76 釈弘一「廻向偈」、弘一法師題字・豐子愷作画『護生画集』光明社、一九三〇年、一〇二頁。

77 豐子愷、前掲『教師日記』、一二八頁（一九三九年四月二十五日）。

78 陳思和「試論九〇年代文學的無名特徵及其當代性」、章培恒・陳思和主編『開端與終結 現代文學史分期論集』上海復旦大學出版社、二〇〇二年、一五九頁。

79 豐子愷「商業芸術」、前掲『豐文集』第三卷、四頁。

80 阿部洋『中国近代学校史研究』福村出版、一九九三年、二五七頁。多賀秋五郎『近代中国教育資料 民国編中』日本學術振

興会、一九七四年、七七〇—七七七頁、八二〇—八二二頁。

81 釈弘一、前掲「廻向偈」一〇二頁。

82 「衆生」の原語「sattva」には多様な意味（存在すること、本質、心、活力、感覚をもつものなど）があるが、仏教では一般に六道輪廻する生き物すべてを指す。六道とは衆生が自ら作った業によつて生死を繰り返す六つの世界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）をいう。

83 以下、『護生画集』第一集からの引用、転載は『護生画集』全集、福建莆田広化寺仏経流通所、一九九六年（以下、『護生画集』一九九六年）による。尚、同書に収録された、『護生画集』第一集は、上海開明書店、一九二九年初版本である。

84 「もしも羊が字を知っていたならば……（原題——倘使羊識字……）」は、『大乘涅槃經』の「屠所の羊」を典故とすると考えられる。

85 修羅とは、もともと血気盛んで、鬪争を好む鬼神を指し、阿修羅ともいう。帝釈天（インドラ神）等の台頭とともに彼らの敵と見なされるようになり、常に彼らに戦いを挑む悪魔・悪神の類へと追いやられた。仏教の輪廻転生の六道では、修羅の住む世界や生存状態を指し、人や天とともに「三善道」とされる。『護生画集』の「修羅」というタイトルはこの輪廻転生観

とは関係なく、屠殺業者の外見が怒りにみちた阿修羅の姿を彷彿とさせるためと考えられる。

86 釈弘一「致豊子愷 六」(一九二八年旧曆八月二三日) 前掲『弘一大師全集』第八冊、三六八頁。「修羅」は編集過程で一旦は削除されたが、弘一法師がこの絵を気に入ったため最終的に収録された。尚、最終的に題名や順番の変更はせず、もともと「修羅」、「肉」の題名で収録された。順番も連続させていない。

87 釈弘一「致姚石子」(一九二八年)、同上、三八八頁。

88 果報とは、過去の行為を原因として、現在に結果として受ける報いのこと。「因」に対する「果」や、「業」に対する「報」の意味。

89 衆生の輪廻する六道のうち、「地獄、餓鬼、畜生」の三つを「三惡道」、「三惡趣」、「三途」といい、生ある者が自らのなした悪業の結果(悪果)、死後にたどる三種の苦しく、厭うべき境涯をいう。尚、六道の他の三つ「修羅、人、天」は「三善道」、「三善趣」と称される。

90 釈弘一「放生与殺生之果報」癸酉(一九三三年、大野注) 五月一日在泉州大開元寺講、前掲『弘一大師全集』第七冊、五五七―五五八頁。

91 釈弘一、前掲「致姚石子」、三八七頁。同書簡によると、弘一法師は姚石子に明末の蓮池大師(一五二三―一六一五、杭州仁和の人。株宏大師。字は仏慧、蓮池は号。蓮宗八祖)の「戒殺放生文」や戒殺放生の張り札も送っている。

92 釈弘一「略述印光大師之盛德 在泉州壇林福林寺念仏期講」、前掲『弘一大師全集』第七冊、五七八―五七九頁。弘一法師はまた別の講演でも、印光法師の名を出して因果応報の重要性を説いている。釈弘一「普勸淨宗道侶兼持誦《地藏經》」同上、五七七―五七八頁。

93 釈印光著述・張育英校注「勸戒殺放生文」序「印光法師文鈔(修訂版)」下巻、宗敎文化出版社、二〇〇三年、一三五―三三頁。

94 Turgenev, Ivan. *Dream Tales and Prose Poems* (tr. from the Russian by Garnett, Constance), London: William Heinemann, 1992.

- 95 「農夫与乳母」、『護生画集』一九九六年、一一一八頁。
- 96 『護生画集』飛鵬芸術社、一九三四年。『護生画集』、『弘一大師法集』第五卷、新文豊出版公司、一九九九年、二二二—二二四頁。
- 97 「出版前言」、沈慶均・楊小玲主編『護生画集』中国友誼出版社、一九九九年、三頁。
- 98 『護生画集』第一集には、母鶏が割られた卵に「私の子ども!？」と驚く作品が収録されている。
- 99 柔石「二三 豊子愷君底飄然の態度」『萌芽月刊』第一卷第四期、一九三〇年、二三九頁。
- 100 同上、二三八—二三九頁。
- 101 夏丐尊「你須知道自己」、前掲『平屋之輯』二七二—二七八頁。
- 102 連桂「二四 夏丐尊の処世与教人」、前掲『萌芽月刊』第一卷第四期、二四三頁。
- 103 釈弘一「致李円浄 一七」(一九三九年)、前掲『弘一大師全集』第八冊、三八四頁。
- 104 釈弘一「致李円浄 一五」(一九三九年旧一月二四日) 同上、三八三頁。
- 105 釈弘一「致豊子愷 二二」(一九三九年七月三日) 同上、三七三頁。
- 106 釈弘一「致豊子愷 二三」(一九三九年二月二日) 同上、三七四頁。釈弘一「致李円浄 一三」(一九三九年端陽後二日) 同上、三八三頁。『護生画集』全六集の出版年度はそれぞれ一九二九年、一九四〇年、一九五〇年、一九六〇年、一九六五年、一九七九年である。尚、第一、二集の作成に關係した弘一法師、夏丐尊、李円浄はそれぞれ一九四二年、一九四六年、一九四九年に死去したため、第三集以降は題詞の書写以外はすべて豊子愷が一人で担当した。
- 107 豊子愷「『護生画集』第二集代跋」、前掲『豊子愷漫画全集』第一一巻、四五七頁。李叔同「『護生画集』第二集題後」同上、四五六頁。

『護生画集』解題(一)——豊子愷の仏教帰依から第一集まで

108 夏丐尊『護生画集』第二集序言、同上、四五三頁。

図版

- 一 豐子愷「燕婦人未婦（漫画） 子愷」『文学週報』第一七二期、五頁。
- 二 豐子愷「子愷漫画」文学週報社、一九二五年（吳浩然編撰『豐子愷書衣掠影』齊魯書社、二〇〇八年、八頁）。
- 三 釈弘一「致豐子愷 四」（一九二八年旧曆八月一四日）『弘一大師全集』（修訂版）編輯委員會編『弘一大師全集』（修訂版）第八冊、福建人民出版社、二〇一〇年、三六六頁。
- 四 豐子愷『護生画集』開明書店、一九二九年（吳浩然編撰、前掲『豐子愷書衣掠影』一一頁）。
- 五 豐子愷「開棺」『護生画集』全集、福建莆田広化寺仏経流通所、一九九六年、一一三九。
- 六 豐子愷「今日与明朝」同上、一一三。
- 七 豐子愷「示衆」同上、一一二〇。
- 八 「夫婦反目 闍黎解勸」、釈弘一「致豐子愷 一〇」、前掲『弘一大師全集』第八冊、三七〇頁。
- 九 次愷「拜年与压岁」、豐子愷『教師日記』万光書局、一九四六年、九四頁。
- 一〇 豐子愷「衆生」、前掲『護生画集』全集、一一一。
- 一一 豐子愷「乞命」同上、一一一七。
- 一二 豐子愷「倘使羊識字……」同上、一一二一。
- 一三 豐子愷「肉」同上、一一三三。
- 一四 豐子愷「修羅」同上、一一二一。
- 一五 豐子愷「暗殺」同上、一一三一。

- 一六 豊子愷 「誘殺」 同上、一一一三。
- 一七 豊子愷 「平等」 同上、一一四四。
- 一八 豊子愷 「農夫与乳母」 同上、一一一八。
- 一九 豊子愷 「我的腿！」 同上、一一一九。
- 二〇 豊子愷 「吾兒！」 同上、一一一五。

本研究は科研費（基盤研究(C)23520419）「李叔同（弘一法師）をめぐる日中文化交流の研究…中国の近代化と日本」の助成を受けたものである。

《护生画集》解题（1）

——从丰子恺皈依佛教到第一集的完成——

大野公贺

丰子恺（1898—1975）是以被称作“子恺漫画”的独特插图和格调高雅的散文，主要在中华民国时期的新兴市民阶级中风靡一时的艺术家。丰子恺还是民国时期著名高僧弘一法师（1880—1942，俗名李叔同）的弟子。两人第一次相遇，是丰子恺进入浙江省立第一师范学校学习的1914年。当时李叔同还未出家，在这所学校教授西洋美术和西洋音乐。

此后，李叔同于1918年突然出家，法名演音（号弘一）。李叔同出家后，丰子恺对其崇敬之情并未改变。丰子恺自第一师范学校毕业后，全身心投入艺术教育。在宗教和艺术的视点上，不如说更为赞同蔡元培的“以美育代宗教说”。

不过，丰子恺在留学日本和设立立达学园之后，于1927年弘一法师主持的佛教皈依仪式中确立信仰。本论文考察的《护生画集》，便是丰子恺信守与弘一法师的承诺，从1929年到1973年花费四十多年的岁月完成的画集，共六集，包括四五〇幅画和题词。全书秉持的是丰子恺面对中国社会所一向提倡的“护心思想”。

丰子恺受到五四新文化运动的影响，提倡靠艺术而非宗教来实现解脱，并作为一名新兴市民阶层的成员在上海都市生活中如鱼得水。是什么原因让他皈依佛教、有时甚而冒着生命危险也要完成《护生画集》呢？作为对这一问题的考察，本论文首先讨论的是从丰子恺皈依佛教到《护生画集》第一集完成的经过，以及对这一画集的社会评价。